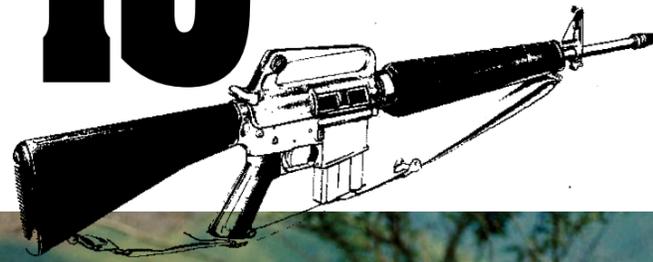


AR-15

AR-15, CAR-15, M16



Cover Illustration
Shutterstock.com
© WORLD PHOTO PRESS 2022
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

ベトコンを探せ!
004 NIGHT HUNTER OPERATION
Part 1

036 ベトナムを遠く離れて——。
私的ベトナム戦争映画／TVムービー Part 12 文／小倉徹

まだ語られていない
038 LST船員の記録 第10回
UNTOLD SEAMAN BLUES

Saigon Memories
050 第48回 サイゴン物語
記者たちのベトナム戦争 [25]

054 解放戦線とは何者だったのか

060 Militaria Roundup!
WW2ドイツ空軍ユニフォーム Part 2

SHARK SHOOTER LIVE-FIRE REPORT!
066 COLT PYTHON 2020
●by Muneki Samejima

074 ウェスタンアームズ新製品レポート
by SHOTGUN MARCY
●L.A.ヴィッカーズ・カスタム ヴィンテージ・コレクション
●L.A.ヴィッカーズ・カスタム リアルスチールVer.
●ベレッタM84FS カーボンブラックHW Ver.

083 東京マルイ 新製品レポート
by Takeo Ishii
次世代電動ガンURG-I
11.5 inch BLACK SOPMOD Block 3

月刊 THEグリーンベレー 文/DJちゅう
089 GREEN BERET
GREEN BERET MOS18A/18X



094 トイガンニュース
TANAKA WORKS
モデルガン
アンマークド“黒星”ピストル HW

ニッポンのちからこぶ ●写真と文／菊池雅之
096 日本で唯一の機甲師団 第7師団
JGSDF 7th Division

100 新製品情報 COMBAT mono

102 サバゲ三等兵APS部
後から俺もまぜてくれ!
赤羽公式練習会を
非公式参加で撃ってみた!

COMBAT FRONT LINE

- 088 祝! サバイバルゲームフィールドSEALs15周年!
- 107 今月中田焦点!
ヘリコンテックス ログフーディ
- 108 新作映画情報『LAMB/ラム』『クリーン ある殺し屋の献身』『人質 韓国トップスター誘拐事件』
- 106 レアミリタリーテクノロジー
- 109 読者PRESENT & CIC
- 111 奥付&次号予告



ミリタリースポッター

No more tender is the night around on the territory of Mexico - United States border because of a 15 million candle power searchlight turning night into day.

US Border Patrol adopted OH-6A Observation Helicopter and they made several modifications to enhance the night performances of the aircraft including a SX-5 Night Sun searchlight and a forward looking infrared (FLIR) system.

Photo/Kesaharu Imai

月の女神が玉座に昇る夜はやさしい。そのはずだったが、メキシコ-合衆国国境周辺では、もうちがう。合衆国国境警備隊が飛ばすOH-6Aヘリが、15万燭光のサーチライトとFLIRシステムを搭載して、夜を昼に変えた。もともとは米陸軍向けに、ヒューズ社が1960年代に製造したOH-6Aは、操縦がしやすくタフなヘリとして、ベトナム戦争で多用された。



ベトコンを探せ!

NIGHT HUNTER OPERATION

Part 1

漆黒の闇に、チャーリーを狩る! 「ファイヤーフライ」の正体

訳と構成 / コンバットマガジン編集部

Source : Hunting Charlie by Night, FIRE FLY by CWO Jay G. Goldsberry
HAWK 1st aviation brigade, December 1968, Volume II Number 4

数年前までは、ベトナムでは夜はベトコンのものだと、ささやかれていたものだ。噂だけでなく、同時に事実でもあった。敵は夜になると、カントリーサイドを好きに歩き回っている。連合軍に待ち伏せ攻撃をかけるのも、物資の補給を受けるのも、夜になればやりたい放題で、好き放題にできるといわれていた。

この状況に対処すべく、1965年に、第145戦闘航空大隊の第334攻撃ヘリコプター中隊に、夜間に戦闘作戦が行なえる武装ヘリコプターを開発せよとの命令がくだった。

その結果、誕生したのが「ファイヤーフライ」である。

始まりは、いつものごとく、試行錯誤の連続だった。それでも研究と開発はしっかりと磨きかけられて、現在では、第3と第4の軍管区内を動き回る敵の動きを封じる圧倒的な力を発揮するまでになっている。第3、第4管区は、メコンデルタをその領域内におさめ、水路や運河や河川が四方八方に発達している。

1967年の夏以来、第3軍管区での夜間ミッションに、「ファイヤーフライ」は常に参加している。成果は上々



ユージン・ストーナーの革命。

AR-15



Illustration/M. Kelly

Photo/U.S. ARMY, WPP Archive, NARA, U.S.M.C, NMAH,
SAWS (U.S. ARMY WEAPONS COMMAND),
Colt Industries Inc., P.S Series, TACTICS,
TECHNIQUES AND CONCEPTS OF ANTIARMOR WARFARE,
TM9-1005-249-101

7.62mm弾と比べて遜色はなく、3倍の弾薬を携帯でき、コントロールでもあったことから、AR-15の採用は、時代の流れにも沿った自然な結果と言えるのだ。

歴史を作ったAR-15

AR-15の紹介としながら、長々と使用カートリッジの話が続けたのには理由がある。

世のすべての工業製品に言えるが、その製品の評価を「高性能」「高機能」「高操作性」「好デザイン」……という言葉で表現することが多々ある。では、それら、性能や機能などなどに、どうすれば「高」がつけられるかと言えば「無駄をなくす」と「無理をなくす」の2つが基本思想となる。例を挙げよう。

1トンの荷物を4トントラックに積んで運ぶのは無駄である。

逆に、4トンの荷物を1トントラックで運ぶのは無理である。

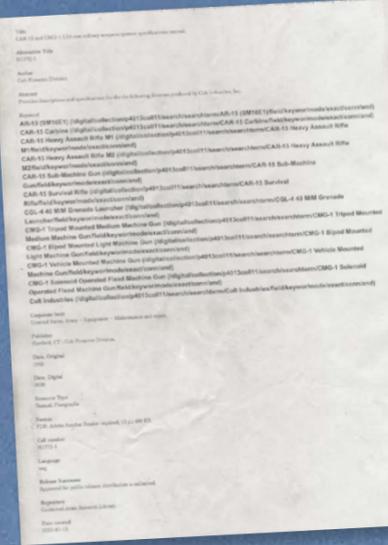
そのため、最初から1トンの荷物を運ぶことが分かっているなら、設計・製造では1トントラックを作る。同じく、4トンの荷物を運ぶと最初から分かっているなら4トントラックを作る。“何を当たり前”の事を”と思われるかも知れないが、その当たり前を限界まで追求したのがAR-15であった。使用する弾丸（.223口径弾・M193カートリッジ）が決定した時（正確にはそれ以前）から、そのカートリッジに最適と呼べる理想のライフル開発がスタートしている。

すでに触れているが、火器（とくに個人携帯の火器）は、同程度の性能であるなら一般的に、小型軽量であるほど有利となる。ならばと、闇雲に小型軽量化を進めると、そこに問題が主に2つ発生する。反動（マズルジャンプ）の増大と耐久性の低下である。

単純に考えるなら、軽量化を手取り早く達成するには、ダウンサイジング、肉抜き（肉薄）、素材変更が早い。しかし、根拠もなしにそれを進めれば、語るまでもなく必要強度を満たせなくなる。小型化も軽量化も、実用性能、実用機能、実用強度、実用耐久性といった諸条件をクリアしなければ意味がない。

平たく言えば、仮に耐久性が「10万発射撃」の小銃を求められた場合、究極の設計は「10万1発」を発射した時点でのご

コルト社がもともとライフルとして設計されたAR-15のさまざまなバリエーションを展開し、訓練と補給の効率化というメリットを前面に押し出してアメリカ軍に売り込みを行っていた。CAR-15（Colt Automatic Rifle-15）と名付けられたAR-15シリーズとコルト社が独自設計した汎用機関銃CMG-1を紹介する当時の資料から、AR-15のポテンシャルを探る。



障、トラブルの発生となる。10万発の射撃でもびくともせず、安全、確実に作動しながらも、10万1発目に故障・トラブルが発生するというものになる。もちろん、現実的には、10万発の耐久性を保障するには、少なくともその1.5倍の射撃テスト（つまりは150,000発）のクリアは求められるが、理想的には、究極的には10万1発目の射撃で最初の消耗（破損）部品の交換といった設計になる。そんな、ギリギリの耐久性は不安という声もあるだろうが、そのギリギリの設計とは、同時に限界ギリギリの軽量化（含小型化）を実現しているとも言える。すなわち、戦闘において、銃器に関しての「極限の優位性」である。

この「ギリギリの軽量化」に関しては、広く知られている事実がある。

AR-15の開発において、初期の試験機種では、銃身をスチールとアルミ合金の複合物としていた。そのため耐久性に問題あり、という評価を米軍から受けてしまう。

銃器の知識が多少であれば「いくらなんでも、高圧の掛かる銃身にアルミ合金素材を使うのは無謀だろう」と、笑うかもしれない。が、そんな、有り得ないような挑戦も含め、アーマライト社は、ユージン・ストーナーは果敢に挑んだのだ。最初から「無理」と諦めず、100gの重量ダウンを、いや10gの重量ダウンを目指し、文字通りに新時代の一挺とすべく、AR-15の開発に心血を注いだのだ。

AR-15が傑作と呼ばれる、評される理由は、その設計が、素材選びやメカニズム、全体サイズ、各パーツの形状などなど、旧来のミリタリーライフルとは明らかに別ものとして製作された結果であり、その「別もの」は、決して奇をてらったわけではなく、真摯に、新開発の小口径高速弾（.223口径弾、M193カートリッジ）の持つ性能と特長を十二分に発揮できる形として具現化したからに他ならない。

これもすでに触れているように、アサルトライフルの小口径化は時代の流れであり、戦闘、戦術の変化から当然の変革と言えるが、AR-15の誕生はまったくの別物として考える必要がある。小口径化は必然でも、AR-15という時代を変えたアサルトライフルの登場には天才の閃きがあった。

冒頭でも触れたようにAR-15の生みの親であるユージン・ストーナーは元画家であった。芸術の世界に身を置いてきた彼の思考と感性は、常に未知のものを求め、新たなものを創造するといった意欲が自然と溢れていたと想像できる。

1950年代に入り、米軍は制式ライフルの小口径化を目指していたが、その際に新ライフルに求めた条件の中で、代表的なものは下記の3つであった。

- ①有効射程距離を落とさない（300m以内の威力を高める）
- ②携帯できる弾薬数を2倍（以上）にする
- ③フルオートでの射撃性能を高める

AR-15 (XM16E1)



CAR-15シリーズの中核をなすモデル。M16の制式名称でアメリカ軍に採用されるとともに、市販でも好評で迎えられることになる。重量は20発入りの弾倉を付けてもおよそ3.3kgと非常に軽量で、全長38.6インチ（98cm）、銃身長は20インチ（50.8cm）ある。

CAR-15 Heavy Assault Rifle M1



ヘビーバレルを装備した火力支援用モデル。分隊支援火器としての使用を想定しており、そのコンセプトは海兵隊がM249軽機関銃“ミニミ”に変わって採用したヘビーバレル仕様のライフル、M271に受け継がれている。

CAR-15 Sub-Machine Gun



銃身長を10インチに短縮し、伸縮式のバットストックを備えたサブマシンガンモデル。拳銃弾ではなくライフル弾を発射する銃にサブマシンガンという名称が付くのはきわめて異例だが、CAR-15シリーズの一員であることを考えるとそれほど不自然ではない。このモデルはベトナムに派遣された部隊で少数が使用されている。

CGL-4 40 M/M Grenade Launcher



ライフルと40mmグレネードランチャーを組み合わせたモデルで、CGLはCOLT GRENADE LAUNCHERの略。アメリカ軍にXM148の名称で仮採用となり、ベトナムに実戦投入されている。

CMG-1 Bipod Mounted Light Machine Gun



AR-15と同じ弾薬を使用するベルト給弾式の汎用機関銃。ここでは二脚を備えた軽機関銃仕様となっている。給弾は左右どちらからでも可能で、ライトとヘビーの2種類の銃身用意されるなど拡張性の高い設計だが、アメリカ軍に採用されることはなかった。

CAR-15 Carbine



小隊長あるいは分隊長による使用を想定したカービンモデル。銃身長はライフルより5インチ短い15インチで、後のM4カービンより0.5インチ長い。このモデルは少数ながら特殊部隊によって使用されている。

CAR-15 Heavy Assault Rifle M2



弾倉とベルト給弾の両方に対応した火力支援型のバリエーション。ベルト給弾の場合は120発入りの弾薬箱を使用する。重量は弾薬を装填していない状態で3.9kgと非常に軽量でありながらアメリカ軍には採用されなかった。

CAR-15 Survival Rifle



パイロット用サブバイバルモデル。見るからに使いづらそうな短縮されたピストルグリップは緊急脱出後でも使用できるようにシートバックに収納するための苦肉の策である。このモデルは空軍による制式採用を目指したのだが、実現はしなかった。

CMG-1 Tripod Mounted Medium Machine Gun



重機関銃としての使用を想定し、三脚に据えられたCMG-1。バットストックが取り付けられておらず、二脚も備えていないため非常にすっきりとした外觀となっている。

CMG-1 Vehicle Mounted Machine Gun



車載用となったCMG-1。CMG-1はAR-15とはデザインが大きく異なるものの、ピストルグリップとフロントサイトアセンブリーはAR-15の部品が流用されているようで、少しでもAR-15と部品を共通化し、アメリカ軍の制式採用を勝ち取ろうというコルト社の意図が感じられる。



AR-15を持った南ベトナム軍空挺隊員と解放戦線容疑者。AR-15の実戦テストに際し南ベトナム軍では特殊部隊、レンジャー部隊、空挺部隊、一般歩兵、さらには民兵までが支給対象となり、空挺部隊では390挺のAR-15と19万5千発の弾薬を受領していた。

そういった二律背反の課題を与えられ、各銃器メーカーは開発を進めたが、アーマライト社はAR-10を造り上げ、後にAR-15へと改良を進めた。現在の感覚ではアルミニウム合金やグラスファイバー、ポリマー樹脂の採用は特異でも何でもな

いが、1950年代において、その選択は突拍子のないものだった。感覚的には、「紙でライフルを造る」という程に常識の外側であった。だが、ユージン・ストーナーのその発想は、実は無謀でも何でもなく、アルミ合金やプラスチックの採用

は単に過去に前例がなかったというだけで、試作しテストすると「充分に使用できる」というだけでなく、旧来の鋼鉄製の銃器に勝るメリットがあることが判明した。何度も触れているがメリットの最たるものは軽量化で、人ひとりが携帯



(左) 空軍パラレスキュージャンパーとして伝説的な働きを見せたウィリアム・ピッツェンバーガー一等兵とM16。ボルトフォワードアシストのないアッパーレシーバーと横に溝の入った初期型弾倉に注意。(右) 機関部にクロームメッキが施されたXM16E1を射撃中の陸軍兵士。作動不良の原因が弾薬に用いられる火薬と分かり問題が解決されると、メッキ加工は行なわれなくなった。

AR-15

きる弾薬・物資は限られるため、銃器の軽量化は作戦上、常に、最優先で追求すべき課題のひとつだからである。

また、AR-15の火器としての代表的なメリットのひとつに直線的なストックデザインが挙げられる。フルオート時の操作性を高められると評価されている。実際は、ストックデザインのみでなく、小口径化やリコイルバッファーもリコイルショックやマズルジャンプ軽減に役立っているが、AR-15を語る上でストレートデザインは外せない長所のひとつである。ちなみに、このストレートデザインに関しては、もともとはAR-10開発時にフレーム上部に操作性を優先してチャージングハンドルを位置決めしたため、それをカバーする意味でキャリングハンドルを設けることで、結果的にストックはストレートデザインとなった……という説もある。真偽の程はともかく、キャリングハンドルもストレートデザインもメリットがあり、チャージングハンドルの位置が

変更された後も全体デザインは変更されず、発展している。

もうひとつ、AR-15の先進性を表すものとして語られるのがフィールド・ストリップング（簡易分解）の容易さだ。メンテナンスが手軽に行なえることはさまざまな環境下でも安定した作動性を維持しやすく、性能を保ちやすい。その点も大きな長所となっている。

銃器も含め、工業製品に対して「エルゴノミクスデザイン（人間工学的デザイン）」が一般的に叫ばれるようになったのは1980年代であった。デザイナー界では、その100年も前からエルゴノミクスデザインという考え方は浸透していたが、真の意味で、あらゆる道具や機械に扱いやすさを求められるようになったのは1980年代からであった。

銃器だけを振り返っても、1990年代、2000年代の発展は急カーブを描いていると知れる。アルミニウム合金は言うに及ばず、ポリマー樹脂の採用も今や常識となった。

そういった「現代の常識」にも最初の一步はあったわけで、多少の意見の相違はあったとしても、1950年代からエルゴノミクスデザイン（とくに軽量化）を取り入れたAR-15は、最初の一步、第一号と呼ぶに相応しい存在と呼べるだろう。

現在AR-15と言え民間用の半自動ライフルを意味する。過去には「アサルトライフル」と呼ばれていたが、1994年から2004年までの10年間、米国ではAR-15を初めとしたアサルトライフルの販売は制限され、装弾数、そのほかにも規制が掛けられた。また、2009年にはアサルト（=突撃・猛攻撃）ライフルの名称に替わり、スポーツライフルの用語が作られ、現在に至っている。

そういった時代時代での受け止められ方はあるにせよ、AR-15は、後のライフル、サブマシンガン、そしてピストルにも大きな影響を与え、もちろん世界のミリタリーライフル、アサルトライフルに刺激と気づきを波及された歴史的な一挺であることは間違いない。



M16

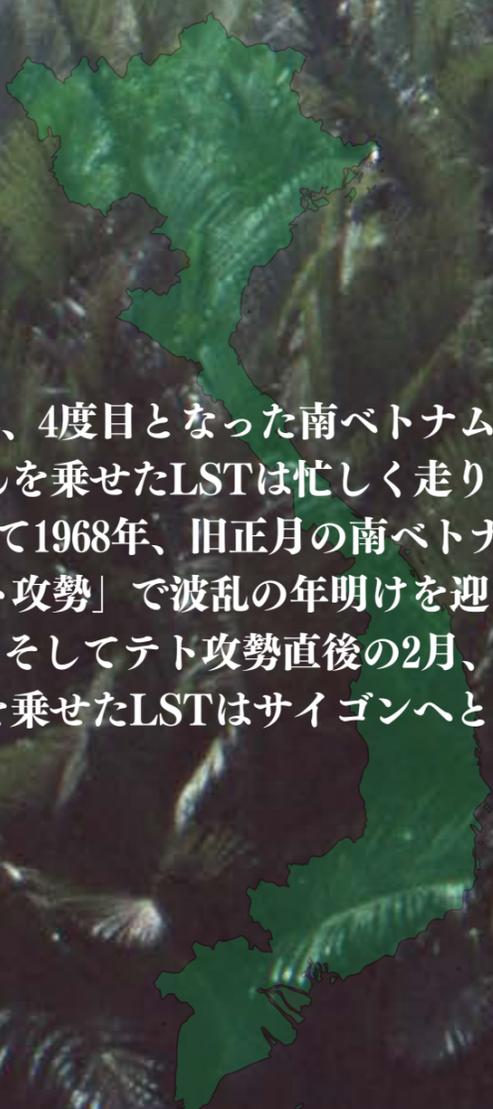
(左) M16を構える空軍の警備隊員。ウッドランド迷彩の戦闘服で分かる通りベトナム戦争の後に撮影された写真ののだが、アッパーレシーバーはボルトフォワードアシストを備えておらず、ローレシーバーにはダストカバーを受けるリップも付けられていない。(右) XM16E1で全自動射撃を行なう陸軍兵士。ベトナムではM16の全自動射撃が日常的に見られるようになり、その軽快な射撃音から「ロックンロール」というスラングが生まれた。

UNTOLD SEAMAN BLUES

写真と語り／木村 守 (元LST乗組員)
文／吉野文敏 構成／編集部

【第10回】

まだ語られていない
LST船員の記録



1967年、4回目となった南ベトナムの海を
木村さんを乗せたLSTは忙しく走り回った。
明けて1968年、旧正月の南ベトナムは
北の「テト攻勢」で波乱の年明けを迎えていた。
そしてテト攻勢直後の2月、
木村さんを乗せたLSTはサイゴンへと向かった。

写真後方、荷揚げクレーンが林立しているのはサイゴン港。サイゴン川は大きく蛇行しており、1万トン級の貨物船が何隻も絶え間なく入港する港の裏側では、小舟で昔ながらの川漁をする風景も見られた。当時のサイゴンの対照的な風景が1枚の写真に収められている。

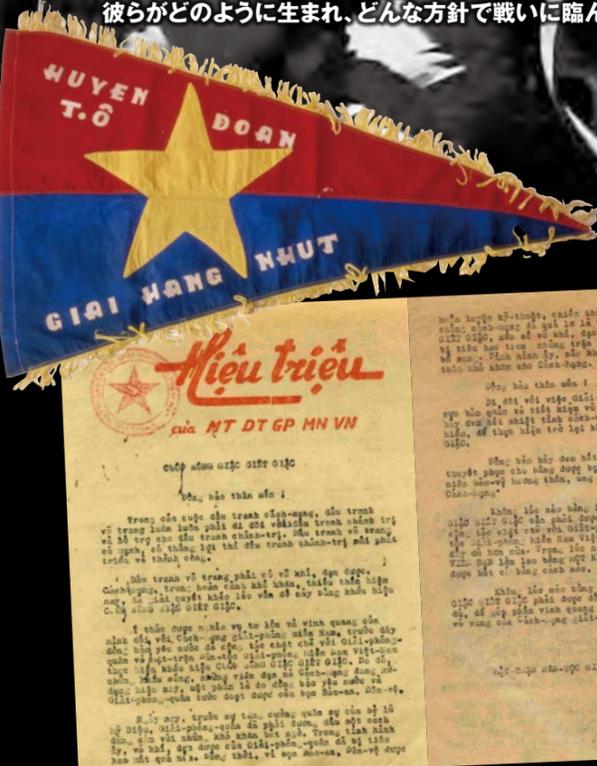


解放戦線とは何者だったのか

文／鈴木健太郎 写真／D. Whiteコレクション、WPPアーカイブ、US ARMY、NARA、K. Imai

ベトナム統一という悲願を実現した立役者でありながら、その姿が未だにはっきりとしない解放戦線。彼らがどのように生まれ、どんな方針で戦いに臨んだのか、当時の資料を見ながら検証する。

(左)解放戦線のラッパに付けられていたバナー。赤と青で南北に分断された国土を表す彼らの旗は臨時革命政府とサイゴン陥落から北ベトナムに吸収されるまでの南ベトナムでも用いられた。(下左)アメリカの本格介入以前に作られた解放戦線のピラ。内容はアメリカ帝国主義と腐敗した南ベトナム政府を倒すため各自が武器を奪って闘争に加わることを呼びかけるもので、戦争中盤まで武器が不足していた解放戦線の実情が読み取れる。



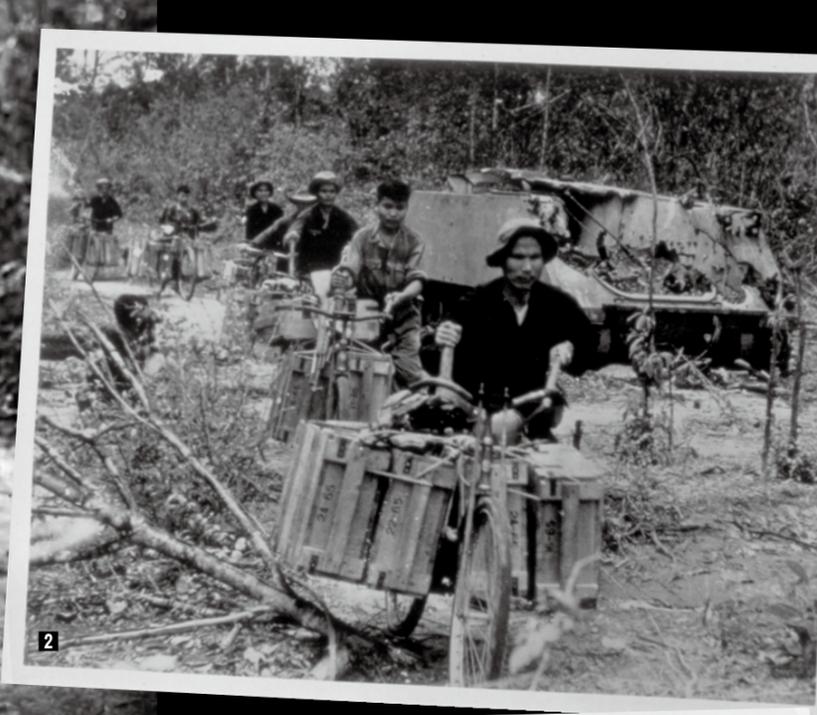
解放戦線の成り立ちとその終焉

ベトナムではインドシナ戦争の終結により南北が分断された1954年以降も不安定な情勢が続き、1959年にはベトナム労働党（現在のベトナム共産党）率いる北ベトナムが第15回中央委員会拡大総会において政治運動だけでなく武力を用いて南ベトナムを解放する方針を示している。「第15号決議」と呼ばれるこの決議によって南ベトナムでは民衆による武装蜂起が続発する中、翌1960年に行なわれた第3回ベトナム労働党大

会で新たな組織「南ベトナム解放民族戦線」の結成が決議され、同年12月20日、南ベトナムのタイニン省にあるタンラップ村において正式に発足した。解放戦線は・アメリカ帝国主義とその傀儡である南ベトナム政府を打倒する・民衆の生活水準を向上させる・男女と各民族の平等を保障し、進歩的かつ民主的な社会を実現させる。・南北間で正常な関係を確立し、ベトナムを平和的に統一するなどの綱領を掲げ、南ベトナム政府の腐敗やアメリカ軍の介入に乗じてその規模を拡大させながら激



1



2

1解放戦線と臨時革命政府の議長を務め、統一後のベトナムでは国家主席代行となったグエンフート。彼は1949年という早い時期に共産党に入党しているがその事実をひた隠しにしており、解放戦線の参加者や支持者の中には彼が共産党員であることを知らない者もかなりいた。2自転車を使って物資を運ぶ解放戦線の輸送部隊。彼らに供給される物資はラオスとカンボジアを通るいわゆるホーチミンロードのほかにも偽装漁船を通じて南シナ海からも運ばれていた。3勧誘を行なう解放戦線の一人と村人たち。解放戦線では幅広い層から支持を得るために彼らの活動が社会主義革命ではないことを強調し、南ベトナム国内のさまざまな勢力を取り込んでいった。4無反動砲を前に集合した解放戦線主力部隊。解放戦線では農村部で一般的だった黒い日常着から独自にデザインされた戦闘服まで実にさまざまな服装が見られ、この写真で分かる通り主力部隊においても戦闘服の色と形が定まっていなかった。5スピーカーを使ってプロパガンダ活動を行なう解放戦線。解放戦線では武装闘争と並行して政治闘争も行なわれており、政策には北ベトナムの意向が強く反映されていた。6解放戦線に加わってシュプレヒコールをあげる人々。左端には音頭をとるリーダーと思しき人物も写っている。



3



5

しい戦いを繰り広げていくのだが、南ベトナムの民衆を主体としているながら指揮権はベトナム労働党およびベトナム人民軍（北ベトナム軍）にあり、その力関係を巡って摩擦が起きることもあった。アメリカが戦力を段階的に減らしながら戦いをふたたび南ベトナム軍に任せるといったいわゆる“ベトナム化”を始めた1969年、解放戦線は南ベトナムに臨時革命政府の樹立を宣言する。事実上北ベトナムの傀儡国家であったこの政府は1975年4月30日のサイゴン陥落で戦争が終結すると南ベトナムの統治を行ない、翌1976年

7月2日、北ベトナムの南ベトナム吸収によって公式に統一ベトナムが誕生したことに伴い解放戦線と臨時革命政府は役割を終えて消滅した。解放戦線では統一後のベトナムにおいても南部にある程度の自主性を求める声が多かった一方で北ベトナムは画一的な統治を目指していたため、サイゴン陥落から統一までの間に解放戦線はベトナム労働党と激しく対立し、解放戦線出身者の一部は統一政府の要職に就いたものの、トラブルを避けるために解放戦線で活動していたことについて未だに口を閉ざす者もいる。



6



Militaria Roundup!

WW2ドイツ空軍ユニフォーム Part 2

ミリタリーの分野で高い人気を持つWW2ドイツ軍。
だがユニフォームの分野で空軍の軍装が紹介されることは意外に少ない。
今回は前回に引き続きドイツ空軍のユニフォーム、そして階級章を紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/サムズミリタリ屋 <https://www.sams-militariya.com>、カンパバタリオン!! <http://www.kampfbataillon.com/>

戦争の拡大とドイツ空軍

1939年9月1日、ドイツのポーランド侵攻で第2次大戦が勃発。ドイツ空軍は地上部隊への戦術的支援に従事し、緒戦の勝利に大きく貢献してフランスを降伏に追い込んだ。しかし40年夏の英本土航空戦（バトル・オブ・ブリテン）では作戦ミス、主力戦闘機メッサーシュミットBf109の航続力不足等の要因により、制空権の確保に失敗。ヒトラーはイギリス侵攻を無期延期し、その兵力を地中海、北アフリカ、そしてソ連へと拡大する。

これら戦線でドイツ空軍は本来の任務である地上部隊への支援任務に活躍。さらに東部（ソ連）戦線の緒戦でドイツ空軍は旧式機が大半を占めるソ連空軍を圧倒したが、42-43年冬のスターリングラード攻防戦の空輸作戦で東部戦線の空軍兵力の約25%を喪失してしまう。また空軍は首脳部に問題を抱え（総司令官ヘルマン・ゲーリングは職務放棄同然だった）、後継機の開発にも失敗するなど多くの問題を抱えていた。

やがて西側連合軍によるドイツ本土空襲が本格化し、ドイツ空軍は緒戦の勢いを失って戦争中期以降は守勢へと立たされていく。

映画「空軍大戦略」

1940年の「バトル・オブ・ブリテン（英本土航空戦）」を描いた映画『空軍大戦略』（1969年製作）。ドイツ空軍にとって最初の挫折となった航空戦をイギリスとドイツの双方から描き、飛行可能な実機（ドイツ軍機はライセンス生産されたスペイン製）を使用したスケールの大きな作品として評価が高い。劇中には本シリーズで紹介しているドイツ空軍ユニフォームが登場しており、軍装ファンにもおすすめ。現在はDVD化されている。



ユンカースJU87急降下爆撃機

第2次大戦初期の電撃戦で威力を発揮したユンカースJu87急降下爆撃機。「スツーカー」。しかし1940年の英本土航空戦では低速と防御力不足から大損害を出し、西部戦線から撤退を余儀なくされた。しかし東部戦線や北アフリカ戦線では活躍の場が残っており、地上部隊の支援に活躍。42年には翼下に37mm砲2門を搭載した襲撃機型が開発され、ソ連戦車の撃破に威力を発揮した。写真は北アフリカ戦線でイギリス軍に捕獲された機体。



ドイツ空軍の地上戦闘部隊

第2次大戦のドイツ空軍は、その組織の中に独自地上戦闘部隊を保有する異色の存在だった。その背景には空軍総司令官ゲーリングの権力欲と、玩具の兵隊を欲しがると子供のように「自分の軍隊」が欲しいという願望があったといわれる。

空軍の地上戦闘部隊に①降下猟兵師団（空挺）、②戦車師団、③野戦師団の3種類で、①の降下猟兵師団は1935年に創設された大隊規模の部隊がルーツで、陸軍も36年に空挺部隊を創設している。部隊が空軍の管轄となったのは指揮系統の単一化が理由だが、それにはゲーリングの意向が強く働いたといわれる。ドイツ空挺部隊が1940年の電撃戦や41年のクレタ島攻略で活躍したが、それ以降は通常の歩兵部隊として戦闘任務に就いた。降下猟兵師団はドイツ敗戦までに10個が編制されている。

②の戦車師団はゲーリングがプロイセン内相時代に編制した特務警察がルーツで、これが35年に空軍に編入されてゲーリングの名を冠したエリート戦闘部隊となった。部隊は40年の電撃戦、41年のソ連侵攻に参加し、42年には規模を拡大して戦車師団に改編。44年には装甲擲弾兵（機械化歩兵）師団が編制され、ヘルマン・ゲーリング軍団を構成している。

③の野戦師団は1942-43年に実施されたソ連軍反攻の際に臨時編制された部隊がルーツで、さまざまな空軍兵科の将兵によって編制された。そして44年中期以降は装備機を失った航空部隊の将兵も編入されたが、全体的に戦闘能力は低かった。空軍野戦師団は大戦中に計22個が編制されている。

空軍降下猟兵部隊

ドイツ軍は1940年の西方電撃戦で本格的な空挺作戦を実施し、華々しい成功を収めている。ドイツ降下猟兵部隊最大の空挺作戦となったのが41年5月の地中海クレタ島攻略作戦だった。攻略には成功したが多数の将兵と輸送機を失い、それ以降本格的な空挺作戦は実施されなくなった。写真はクレタ島攻略作戦で、飛行場に強行着陸したユンカースJu52輸送機から飛び出す降下猟兵。



フリーガーブルセ FLIEGERBLUSE

フリーガーブルセはナチス・ドイツ総統アドルフ・ヒトラーが再軍備を宣言した1935年に採用された短ジャケットで、名称を英訳すると「フライング・ブラウス」となる。つまり飛行服としてデザインされたジャケットで、正面合わせのボタンが表に露出していないのは、狭い機内で各種機器に引っかからないための配慮で、裾も動きやすさに配慮して短くなっているのが特徴。デザインはドイツ帝国陸軍の野戦服「ブルセ」に似ている、との指摘もある。

フリーガーブルセには将校用と下士官兵用の別があり、将校用は生地はウール・ギャバジンを使用。下士官兵はウールとレーヨンの混紡が使用されている。基本的デザインは将校用と下士官兵用で同じだが、一部裁断に細かな違いが存在。襟には将校が銀、下士官兵には兵科色（内訳は別表を参照）の縁取りが付いたが、下士官兵の縁取りは戦争中に廃止された。

フリーガーブルセは本来は飛行服として開発されたが、大戦中には4つポケットの制服（前回紹介のトゥーフロックおよびヴァッフェンロック）の代わりに着用されることが多く、航空兵以外にも降下猟兵と呼ばれた空挺部隊や、空軍地上部隊の将兵が広く着用している。



襟

フリーガーブルセは一般に開襟で着用されるが、閉じて着用することも可能。襟には将校が銀色、下士官兵が兵科色の縁取りが付いたが、戦争突入後に兵科色の縁取りは廃止されている。フリーガーブルセを開襟で着用する際はブルー・グレーのシャツと黒のネクタイを着用するが、下士官兵が外出着以外として着用する場合は下にシャツを着ないのが一般的だった。

正面合わせ

正面合わせはボタンが表面に露出しないフライフロント式。これは狭い機内で各種機器に服が引っ掛からないようにするのが目的。

内張り

将校用フリーガーブルセはフル・ライニング（内側全面に内張りが付く）式で、布地は滑りのよい生地が使用された。将校のユニフォームは将校が自前で仕立てるため、裏地の色等にはバリエーションが存在する。



テラー・ラベル

内ポケットの下に縫い付けられたテラー・ラベル。メーカーは前回紹介したユニフォームを製造販売しているG.アスマン社。同社は1948年にプロイセン帝国のハレ（ザール）で創業した老舗で、ドイツ統一（1870年）以前から現在まで創業を続けている。



1940年の「バトル・オブ・ブリテン」で乗機を撃墜され、捕虜となったドイツ空軍の航空兵。手前の2人がフリーガーブルセを着用しているが、履いているスポンは異なる。彼らが着用しているのは初期（戦前）タイプで、裾ポケットと国家徽章がなく、襟に兵科色の縁取りが付くのが特徴。



裾ポケット

裾ポケットは上に向かって湾曲したスリット式。機械の各種機器に引っかかる恐れがあるため、フラップ（蓋）は付かない。初期タイプでポケットが付くのは将校用のみだったが、1941年には下士官兵用にも追加されている。

ちなみにポケット内側に見える金属製リング（矢印）は前回紹介した短剣を吊るためのもの。

袖口

袖口は前回紹介したトゥーフロックやヴァッフェンロックのように折り返し（ターンバック・カフス）ではなく、シンプルな筒袖。これはフリーガーブルセが飛行服としてデザインされたためで、袖口が機内の各種機器に引っかからないための配慮。

フリーガーブルセは大戦中には空軍地上戦闘部隊の野戦服としても広く着用された。写真は1941年4月にギリシャで降伏したイギリス軍捕虜を護送する空軍降下猟兵で、2人ともフリーガーブルセを着用している。





COLT PYTHON 2020

コルト・パイソン——。銃が好きな人ならば必ず耳にしたことがある名前だ。映画、ドラマ、漫画の世界で活躍してきた日本でも知名度の高いモデルだが、実銃の世界では既に骨董品の領域。とっくの昔に生産が終了し、年々取引価格も上がっている。コルト社は再生産を願うファンの声に2019年末、遂に応えることになる。復活を遂げた新型コルト・パイソンをご紹介します。

Report by Muneki Samejima
Special Thanks to Bruce Shoji



Colt Python 2020
●弾数:6発
●全長:約292mm
●重量:約1,305g
●口径:.357 Magnum
●価格:1499ドル

こちらが2019年末に発表され、2020年のショット・ショーで多くの人々が手にしたコルト・パイソン2020だ。ファン待望の復活となった。

ヴィンテージ・パイソン VS パイソン2020

リボルバーのパイオニアといえばコルト社。西部時代にはシングル・アクション・アーミーを生み出し、オートマチックの1911も含めて、かつてアメリカ軍制式ピストルはコルト社の製品だった。コルト社は、1955年に.357 Magnumを発射できる高級リボルバーとしてパイソンを発売している。バレルの長さのバリエーションとして、2.5インチと4インチ、

後に「パイソン・ハンター」と呼ばれる8インチと「コンパクト・パイソン」と呼ばれる3インチモデルが1980年代に登場。量産しにくい構造であり、職人たちによって念入りに手作業で仕上げられていた。銃の表面処理は「コルト・ロイヤル・ブルー・フィニッシュ」と呼ばれ、深みのある青を帯びた黒い美しい仕上げだ。この時代のパイソンを手にとると、各部のエッジ等からそれが丁寧な手作業によるものだということが分かる。しかも、外観だけではなく、

内部も職人によって入念に仕上げられており、コルトのほかのリボルバー・シリーズよりもトリガー・プルの質も一枚上とされている。ただし、こうした古き良き時代の高品質な仕上がりは1980年代以降、徐々に荒くなりクオリティが落ちていったというのが愛好家の評価だ。そのせいもあり昨今、状態が良い個体や、ベテランの職人が仕上げた個体はかなりの高値で取引が行なわれている。コルト社は20年以上前に販売数減少と生産コストの高騰を理由として

パイソンの生産を打ち切った。その後は限定品として数回発売されたのみ。以降、パイソンの入手は中古市場でしか出来なくなり、2022年現在、銃の状態や生産された年によって、中古市場での価格はまさに“ピンからキリまで”だ。僕がアメリカに来た頃は、1,300~3,000ドル前後で取引されていたが、現在は最低でも2,500ドル以上の価格で取引されている印象だ。2019年末、コルト社はその歴史的なアイコンックといえるパイソンの



新型コルト・パイソンが発売後、そちらを「パイソン2020」と呼ぶようになり、オリジナルの方は「ヴィンテージ・パイソン」と呼んで、差別化を図るようになっていく。オリジナルのロイヤル・ブルーは、やはり美しいのひと言に尽きる。

L.A. VICKERS VINTAGE COLLECTION & REAL STEEL Ver.

傑作セミオートM1911の、ベーシックなシルエットを継承する近代型タクティカル・カスタム



メタル・チャンバーカバーの刻印は、高精度ステンレス・バレルを象徴する「バースト」タイプ。

フロント・セレーションを追加したスライド、シャープなデザインのフレームなどを採用するヴィッカーズ・カスタム。M1911のベーシックなシルエットを継承しながら、機能性と近代的なイメージが創造されている。

元デルタ・チーム隊員という経歴を持つラリー・ヴィッカーズは、長年に渡る豊富な戦闘体験を基に、近代的で高度な実践的射撃テクニックを伝授するカリスマ・インストラクターの一人として知られ、日本の銃器ファンにも人気が高い。そんなヴィッカーズが、スプリングフィールド・アーモリー（以下：SFA）のハイ・クオリティな、クローン・ガバメントをベースにデザインしたのが「L.A.ヴィッカーズ・カスタム」だ。10代で米軍に入隊し、特殊部隊グリーン・ベレーに所属したヴィッカーズは、いったん軍を離れて機械工学を学び、1990年代に秀逸なレース・カスタムを製作することで一世を風靡したガン・スミス、スティーブ・ナストフの元で、M1911系カスタムのテクニックをきわめた。米軍に再入隊してからは、陸軍デルタ・チームに所属。1989年のパナマ侵攻に際して、CIA工作員救出作戦に参加したメンバーの一人だったことが知られている。過酷な作戦に従事しながら、任務遂行に欠かせないコンパクト・テクニックと、そこで求められる理想のガバメントを研究。豊富な実戦経験と、身に付けたカスタム・テクニックのすべてを注ぎ込んで「L.A.ヴィッカーズ・カスタム」を作り上げた。

傑作セミオートM1911のベーシッ

クなシルエットを継承するその外観は、シンプルながら戦闘用セミオートに求められる優れた操作性をきわめた機能美に溢れている。見かけの豪華さよりも、戦いに勝つための必要充分なカスタム・アップ。その1点を目指して、シェイプしていった結果が、ガバメントらしさを充分に残したヴィッカーズのM1911 カスタムだ。M1911とそのカスタム・アップに強いこだわりを持つウエスタン・アームズ（以下：WA）は、この.45カスタムが公表されると、いち早くHWモデルを製作。M1911ファンを狂喜させた。何度かの再生産の後、ヴィッカーズ・カスタムは独特の金属感を漂わせるプレミアム・モデル「リアルスチール・バージョン」に進化。実射を楽しむファンにとっても、コレクションを目的にしたファンにとっても、価値あるカスタム・ガンに発展した。今月は、そんなヴィッカーズ・カスタムのバリエーション、コレクション派に向けた豪華版「ヴィンテージ・コレクション」と、実射派向きのベーシック・タイプ「リアルスチール・バージョン」が、揃って再生産される。酷暑の夏を乗り切る熱いガバメントの再登場だ。

※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様と異なる場合があります。



スライドにセットされたフロント、リアのサイト・グループ、前後のッキング・セレーションを精度の高い機械加工で再現。刻まれたSFAのトレードマーク、フレームのモデル名など、刻印類はすべて彫刻機で深くシャープに刻まれている。

特別限定モデルとして制作されたスペシャル感いっっぱいのヴィンテージ・コレクションは、パッケージも特別仕様。M1911クラスのセミオート2挺の収納が可能な、セミハード・タイプの「WAガンケース」に収められて提供される。



TOKYO
MARUI



次世代電動ガン

URG-1 11.5 inch BLACK SOPMOD Block 3

米軍特殊部隊の要求に応えるべく「制式採用カービンM4A1の性能をあらゆる条件下で向上させる」事を目標とした拡張パーツ供給計画「SOPMOD(ソップモッド)M4プログラム」。その最新形状“Block3(ブロックスリー)”として世界中の特殊部隊ファンから熱い注目を集める「URG-1(=ユー・アール・ジー・アイ)」の次世代電動ガンに、待望の11.5インチ・ブラックバージョンが登場!

Photo & Text by Takeo Ishii
株式会社 東京マルイ ☎03-3605-1113
www.tokyo-marui.co.jp

要はレイル・ハンドガード! M4A1改修計画“SOPMOD”

メーカー同士の熾烈な開発競争によって日進月歩の発展を遂げている各種の光学照準器、照明装置、暗視装置、サプレッサー、グレネードランチャー等の中からその時々優秀な製品がさまざまなテストを経て選定され、M4A1カービンの特殊部隊向け改修UPグレード事業に投入されてきた。

「SOPMOD(=ソップモッド=

Special Operations Peculiar Modification) M4計画」と銘打たれたこのプロジェクトの中でも重要視されてきたのが、さまざまなオプション機器と銃本体を確実に連結する役目を果たす「レイル付きハンドガード」の機能とデザインである。

最初の「SOPMOD Block 1」にはKAC(ナイツ・アーアメント・カ

ンパニー)社製の「RIS/RAS」が、現場からの意見をフィードバックした改良型「SOPMOD Block 2」には銃身をフリーフロート構造にできるDD(=ダニエル・ディフェンス)社製の「RIS II」が、そして最新型の「SOPMOD Block 3」とされる銃には、ガイズリー社製「スーパーモジュラーレイルMK16 M-Lok」の採用が確認されている。



月刊

THE グリーンベレー GREEN BERET

vol.45

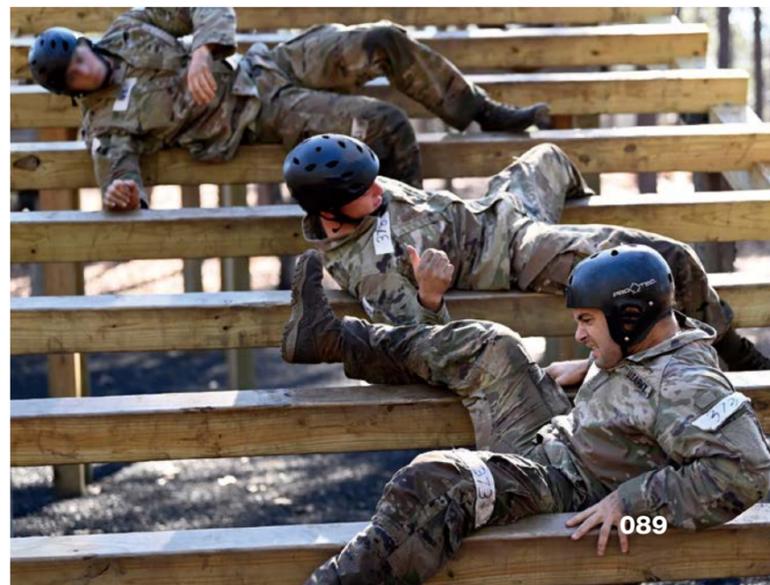
GREEN BERET MOS 18A/18X

[MOSとは] Military Occupation Specialtiesの頭文字を取って「MOS」と呼ばれるアメリカ軍における職種専門技能のこと。グリーンベレーは陸軍MOS特殊部隊18ナンバースに分類されたMOSを取得。18A(ODA)指揮官(得校:Special Forces Officer/※以下Special Forces: SF)、18B(武器兵器: SF Weapons Sergeant)、18C(工兵: SF Engineer)、18D(医療: SF Medical Sergeant)、18E(通信: SF Communications Sergeant)、18F(作戦補佐情報: SF Assistant Operations and Intelligence Sergeant)や、もっとも高度な訓練を受けた18Z(シニア: SF Senior Sergeant)また特殊部隊資格取得前の18X(SF Enlistment Option)があります。12名のODA(Aチーム)は上記のMOSを持った隊員らが集まり構成されています。

グリーンベレーファンの皆さん、そろそろなりたい役職が決まってきましたでしょうか？ SF-MOSシリーズ遂に最終回です。最後に残されたMOSはそう、チームキャプテンMOS18A!! 指揮官、リーダー、キャプテン、小隊長ポジションとなるチームの牽引役です。キャリアとしては最も高位で学ぶことの多い18A。責任感が強く統率力もあり、出世を狙いたい人におすすめです。そして、これまで紹介したMOSを振り返りつつ、最後に特別枠

MOS18Xをご紹介します。さて、これまで数号におよび紹介した陸軍特殊部隊向けMOSですが、軍で働く上で必要な専門技能というだけでなく、MOSは退役後のセカンドキャリアに活用される側面もあります。海外ではMOSごとに「退役後はこんな仕事があるよ」という指針が書かれたリクルート向けWEBサイトが複数存在しますが、MOSの選択は人生設計をする上での要素の一つでもありますね。

参考文献
Special Forces Association「A brief history of Special Forces and Special Operations.」
GOARMY.COM. OMK「Army MOS 18X」. ARMY TIMES「New MOS and formations could come to Army spec ops in tech-savvy era.」
ASSOCIATION OF THE UNITED STATES ARMY「NEW APPROACH NEEDED FOR FUTURE THREATS」
文/DJちゅう 写真/U.S.ARMY





日本で唯一の機甲師団 第7師団 JGSDF 7th Division

東西冷戦時代、日本の最前線を守ってきた第7師団。その最大の特徴は、戦車を中心とした日本唯一の機甲師団編成となっている点だ。90式戦車および10式戦車を配備する3個戦車連隊に加え、完全装甲車化を成し遂げた第11普通科連隊、第7特科連隊、第7高射特科連隊など、他職種においても特別編成となっている。ふたたびロシアの脅威が高まりつつある今だからこそ、北海道の重鎮たる第7師団を詳解しよう!

本連隊でも度々取り上げている第7師団——。

北海道の防衛警備を担当する北部方面隊には、第2師団、第7師団、第5旅団、第11旅団と2個師団・2個旅団が編成されている。その中で、道央を担当するのが第7師団だ。

歴史は古く1955年に新編された第7混成団がルーツだ。そして1962年8月15日に第7師団へと改編された。その頃は、第11、第23、第24普通科連隊の3個普通科連隊を主たる隷下部隊としていた。

しかし、東西冷戦真っ只中となる1970年代に、ほかの師旅団にはない

編成とすることを決めた。それが機甲師団化だ。北海道は当時の敵であったソ連と隣接しており、日本にとって最大の脅威であったソ連軍が侵攻を企てたならば、地上部隊を着上陸させてくるのは間違いなく北海道であると見積もられていた。

ソ連軍は戦車を中心として、諸職種協同戦闘部隊編成で戦う。配備されていたのが、125mm滑腔砲を主砲としたT-72やT-80といった戦車だ。これらに対抗するため、陸上自衛隊は第7師団に大量の戦車を配備した。この方針に則り、1981年、第7師団は機甲師団となった。

まず、もともとあった第7戦車大隊を第71戦車連隊へと拡大改編した。さらに、北部方面隊直轄部隊であった第1戦車団を廃止。同団には、第1～3戦車群という3つの群が編成されていた。まず第1戦車群のみを北部方面隊直轄部隊として残した。そして第2戦車群を第72戦車連隊に、第3戦車群を第73戦車連隊へと改編。こうして、第7師団は、第71、第72、第73戦車連隊の3個戦車連隊体制を構築した。戦車を連隊規模で3個も運用するのはもちろん第7師団のみだ。

その代わりに普通科部隊を第11普通科連隊のみとした。第23普通科連

隊については、第11普通科連隊と統合され廃止。第24普通科連隊については、一部隊員を第11普通科連隊へと移し、九州の第8師団隷下部隊へと移籍した。現在は西部方面混成団隷下部隊として、えびの駐屯地（宮崎県）に所在し、即応予備自衛官を受け入れるコア部隊となっている。

その後、各部隊も整備していき、冷戦期に機甲科部隊として完成した。現在の編成を記すと、師団司令部および師団付隊、第71、第72、第73戦車連隊、第11普通科連隊、第7特科連隊、第7高射特科連隊、第7後方支援連隊、第7施設大隊、第7通信大隊、第

堂々たる行進をする第73戦車連隊の90式戦車。砲塔に部隊マークである“勝兜”が描かれている。1956年に第1特車群・第104特車大隊として新編され、1962年に第1戦車群・第104戦車大隊を経て、1981年第7師団隷下となり現在の編成となる。

